

「自ら考え判断し、意欲的に学習する児童の育成」

～算数科における授業の構造化を意識した学習活動の工夫～

I 研究の内容

1 研究の具体的内容

(1) 算数科における「授業の構造化」を意識した学習活動の工夫について

ア学習会 算数科における「授業の構造化」を意識した授業づくりのポイント

児童の思考、理解を深めるための手立て

山梨県教育委員会義務教育課 富士池 慎一 指導主事

イ学級集団づくりのためのQ-Uの分析とその結果を生かした取り組み

ウ導入部分で見通しを持たせるための工夫

エ学び合いを深めるための手立て

・スモールステップ ・授業での児童の理解度の把握

オ思考を深めるためのノート指導と学習の振り返り

(2) 言語活動を整えるための日常的な取り組みの共有

(3) NRT, 山梨県学力把握調査(3・5年), 全国学力学習状況調査(6年)の結果

の分析と課題解決のために必要な取り組みの検討・実施

(4) 全学年を通した学習規律の確立

(5) 「授業の構造化」を意識した授業案の作成・検討及び授業実践

ア研究授業

・第1学年 算数科 「ひきざん」 授業者 小林千恵美 教諭

検討 指導助言 甲州市スクールカウンセラー 長尾 雅裕 先生

研究会 指導助言 甲州市教育委員会 那須 丈彦 指導主事

・第5学年 算数科 「単位量あたりの大きさ『比べ方を考えよう』」

授業者 中根 淳 教諭

イ授業実践

・第2学年 「ひっ算のしかたを考えよう」 授業者 依田 史 教諭

・第6学年 「速さの表し方を考えよう」 授業者 保坂 恵 教諭

・第4学年 理科 「物の体積と温度」 授業者 駒田 覚 教諭

・第4学年 「ちがいに目をつけて」 授業者 精進 利恵 教諭

・ひまわり学級 「かたちであそぼう」 授業者 海沼 潤子 教諭

・第3学年 「はしたの大きさの表し方を考えよう～分数を使って」

授業者 山縣 重人 教諭

II 成果と課題

「自ら考え判断し、意欲的に学習する児童の育成」を研究主題に、積み上げてきた実践を生かし、算数科での「授業の構造化」を意識した授業づくりを進めてきた。具体的な取り組みとして「見通しをもたせる」「学び合い」「振り返りをする」の指導上のポイントに、スモールステップの導入、授業での児童の理解度の把握、ノート指導などの点をいくつか加えて学習活動を行うようにした。日々の授業においても、子どもの理解を深めるために、どのように工夫して授業を行い、子どもたちに取り組みさせていくかを考えたり、日常的に教職員同士で話し合ったりすることが多くなった。各学年のつながりを考えた研究になり、研究主題は教える側にとって適切であった。

また、NRTや学力把握調査の算数の結果分析を行い、各学年で課題となっている領域を明らかにしてから授業の研究をすることで、児童が「学ぶ楽しさ」や「考える楽しさ」を味わい、学習意欲を向上させることにつながった。10月のQ-U検査の結果からは、ほとんどの学級において児童の学習意欲の数値が全国平均を上回った。12月に行った学校生活アンケートでも、子どもたちの学習に対する意欲が高く、「授業は楽しくわかりやすい。」「先生は分からないことをていねいに教えてくれる。」「自分は学校から帰ると家庭学習や明日の学習の準備をしている。」の項目で、「本当にそう。」「だいたいそう。」を合わせると、どれも90%以上になっている。今後、学習意欲をさらに向上させていく、もしくは維持していくことに努めていきたい。

さらに、子どもたちの学力の向上については、各学年で行っているテストの2学期の学習到達度とテストに明記されている目標点を比較することによって検証した。ほとんどの学年で到達度が目標点を超えていることから、今年度の取り組みにより、多くの児童が学習をより分かったり、できるようになったりしていること分かった。

算数科の授業の構造化を意識した学習活動の工夫により、昨年研究成果に2年次として実績を積み重ねることができた。算数科はどの学年にもつながりのある教科であり、「分かった」「できた」が明確であるため、児童の実態をもとに系統性を考えた授業づくりができ、研究主題に迫る適切な副主題設定になったといえる。

甲州市「確かな学力」育成プロジェクトの取り組みを校内研に位置づけてから年々、先生方の授業づくりのための意見交流が多くなり、教材研究が細かく行われるようになってきたと感じる。これからも限られた時間を有効に使う工夫をし、誰もが取り組める視点で研究実践を展開していきたい。そして、今年度の成果をふまえ、「授業の構造化」に取り組みつつ、学習規律、学級集団づくり等、学習を支える部分についても教職員間で確認し、研究を深めていきたい。

III 成果物

1 研究授業、一人一実践の指導案8点と使用した教具、ワークシート

(研究主任 山縣重人)